［課題］

第 2 回課題（1500 字～2000 字）
これからの社会系教科・科目の課題と展望についてまとめなさい。

［本文］

金鐘成は日本のこれからの社会系教科について，3 点の課題点を挙げている。

１点目は従来の板書とノート整理を中心とした「知識伝達型」の授業で，問いに対する探究や意思決定，問題解決といった新しい学力観（知識構築型）の要請に応えることができるのかという点である。[1]

長岡技術科学大学の市坪誠は，学校教育とりわけ，社会科系教科目で求められる人材育成について次のように述べる。[2]

> これからの社会は，世界や地域がかかえる諸課題に立ち向かう人材が求められ，それは自律的，能動的，協働的，創造的な姿勢が不可欠となります。背景には，地球環境の保全，腎臓増加への対策，資源の保全，エネルギーの確保，紛争への対応などといったグローバルな課題があり，将来の変化を予測することの困難さがあります。社会の急激な変化や複雑化に対応するため，ある特定の専門的知識に加えて汎用的な能力が求められ，PISA リテラシーやグローバルリテラシー，21 世紀型スキルなどの新しい概念が世界で広がり，（中略）「教員が何を教えるか」よりも「学生が何をできるか，学生のできることは何か，さらには成果」に力点が置かれています。

そして，市坪は ICT の持つ学生同士のコミュニケーションツールの活用に力点を置く。「学ばせる−学ぶ」という一方通行の関係から，「学び合う」という双方向の関係に授業のデザインが大きく変わると述べる。

また，立教大学の河野哲也教授は，上記の社会の急激な変化と教育の関係について，グローバル化，環境保護，人工知能の３つを取り上げ，社会貢献への能動的な働きと人と人とが関わり合い，互いの知識を交流させる対話術の２つを提案している。[3]

社会教育の課題の２点目は，場の空気を乱さない同調圧力の強い日本の教室においては，異なる意見を安心して出し合える教室の雰囲気づくりである。「和」の実現が優先される日本では，多数の意見と異なる意見を発することは望ましくないとみなされてしまう。[4]

国士舘大学の桑田は，得てして感情的になりがちな議論において，できる限り，自分や相手がその結論に至るまでのプロセスをワークシートに書き出すことを提案する。そして自分と相手のディベートも対立ではなく，新しい意見や疑問に至るプロセスだということをワークシートで確認していくことで，安心して意見を出し合う探究学習が実現できると述べる。[5]

社会教育の課題の３点目は，子供を未来の市民としてみなす教育をすべきなのか，それとも子供を現在の市民とみなして教育すべきなのかという点である。[6]

上智大学で国際教育開発を研究している小松太郎は，これからますます多民族共生社会を迎える現代において，学校の教室が政治の場となっていると警鐘をならしている。そして，主権者教育や人権教育は学校教育にしっかりと位置付け，生徒一人一人が主権と人権にフォーカスしなければならないと述べる。安易な民族教育や宗教教育は，逆に排他的な民族意識や宗教意識を高めるに過ぎず，多民族国家で内戦を経験したコソボでは危険な右派教育になってしまうと述べ，人権の主体が生徒個人であるという考え方に基づく平和教育が社会科教員に求められると説明する。[7]

金鐘成は，上記の重い課題に対しても，授業の最終決定者である教師が変われば，良い方向解決できるはずだとし，教師が「自らのゲートキーピング（主体的なカリキュラムの調整）をメタ認知しそのゲートキーピングを洗練していく教師を育てることができれば，どのような変化が訪れても日本の社会系教科教育の未来は明るい」と述べる。

OECD が最近強調している「教育の質は教師の質を超えられない（The quality of education will never exceed the quality of teachers)」という言葉がある。教員自身が質を高めていく研修と努力，そして教職の魅力を大切にしていきたい。[8]

文字数：1945 字

＜引用・参考文献＞

---

[1] 社会認識教育学会編『中学校社会科教育・高等学校公民科教育』学術図書出版会，2020，pp.136-137 参考

[2] 市坪誠『授業力アップ　アクティブラーニング：グループ学習・ICT 活用・PBL』実教出版社，2016，pp.12

[3] 河野哲也『問う方法・考える方法：「探究型の学習」のために』筑摩書房，2021，pp16-33 参考

[4] 社会認識教育学会編前掲書，pp.138-139 参考

[5] 桑田てるみ編『中学生・高校生のための探究学習スキルワーク』全国学校図書館協議会，2012，pp.94-95,114-117 参考

[6] 社会認識教育学会編前掲書，pp.140-142 参考

[7] 小松太郎『教育で平和をつくる：国際教育協力のしごと』岩波書店，2006，pp.120-125 参考

[8] 学びの場．com『篠原 真子　PISA を語る。- 教育インタビュー』2015，https://www.manabinoba.com/interview/23019.html　（2024/05/21 参照）